

新詩社『明星』の同人 渡邊湖畔の創作活動の軌跡

— 短歌から漢詩への志向 —

渡邊湖畔は新潟佐渡を代表する文人である。その活動は短歌・漢詩、また俳句の分野にわたり生涯創作への意欲は衰えることはなかった。しかし七十余歳の生涯で六十歳半ばごろから視力の減退によってその活動は急速に制限され作品の創作に致命的な打撃を受けた。筆者はかつて新詩社『明星』の主筆者、与謝野寛の漢詩の分野での文学活動に於いて、重要な位置を占めるものとして、堀口久万一・吉田学軒・渡邊湖畔の三人の名を挙げた^①。この三人と与謝野寛との関係は三者三様であり、堀口久万一は「漢詩の盟友」であり、息子の堀口大学は寛夫妻の弟子、新詩社の同人でもあった。吉田学軒は、寛が森鷗外の縁で知り得た「漢詩創作の師」である。渡邊湖畔は寛夫妻の弟子で、新詩社の同人であり加入は明治三十五年、『明星』での湖畔はあくまで歌人であったのだが、師の寛とは漢詩を通して「師・友」でもあった。

堀口久万一は外交官、吉田学軒は漢学の専門家、渡邊湖畔は佐渡の実業家で、生業もまたそれぞれ異なっていた。三者にはそれぞれ代表的作品を収録した『長城詩抄』、『学軒全集』、『渡邊湖畔遺稿集』が残されているが、前二者が漢詩・漢文集であるのに対して、湖畔の集は短歌・俳句・漢詩の三分野構成の作品集である。

本稿ではこの多分野にわたる渡邊湖畔の創作活動について、新詩社『明星』との関係を中心に三分野にわたる文学活動の流れを論及するのが主な目的であるが、中で特に重きをおくのは漢詩創作の分野であ

る。

○佐渡の人 渡邊湖畔

湖畔の履歴についてはすでに以前記したが、必要上簡単に述べておくらば、湖畔は号、名は林平、後に金左衛門。明治十九年（1886）七月一日生、昭和三年（1928）九月一六日歿、享年七四。新潟県佐渡市畑野町に生まれ、小学校卒業後に佐渡一宮の宮司、美濃部禎（羽茂の人）について国漢を学ぶ。家業は呉服商、後に佐渡電灯会社社長（一九歳）となる。長男の栄太郎は早稲田大学文学部教授、専門は英文学である。

歌人として高名であった湖畔の師与謝野寛の文学創作活動の原点が漢詩であったのに対し、渡邊湖畔は歌人また漢詩人として名を知られるが、創作活動の原点は短歌であった。湖畔の最も早期の作品は、十六歳の時に『わかな舟』^②（明治三十五年（1908）五月号）に掲載された作品かと思われる。以後、『わかな舟』に投稿を続けており、『遺稿集』には明治三十九年（1906）一月～十二月までの投稿作品を収録する（詩二篇・短文一篇・短歌九一首）。その間、『白百合』^③（相馬御風等主宰、明治三十九年十二月号）に短歌九首を投稿したり、『文章世界』^④（田山花袋編輯）、明治三十九年五月号に、短歌及び散文を投稿している。

西村 富美子

『明星』の主宰者、与謝野寛との接触は当時から既にあり、明治三五年（1902）五月に寛は初めて佐渡を訪れており、その時の湖畔との接触の有無は記していないが、翌三六年（1903）には湖畔が新詩社の同人となっているので恐らく両者の最初の出会いには前年の三五年であったろう。（『自伝』）

ただし、明治三六年に同人となって以後、湖畔の作品が初めて『明星』に見えるのは、明治四一年（1908）、奇しくも『明星』終刊の年であった。従って新詩社の同人となって以後も、四、五年の間は先に挙げたようなこれまでの雑誌に寄稿していたということであろう。これらの投稿作品のほとんどすべては「短歌」であり、歌人湖畔としての創作活動であった。『明星』掲載の湖畔の短歌を少し挙げておこならば、（各号の「新詩社詠草」の題目）、

あたたかき悩みと永久にわれ泣かむ

①

塾みて落ちゆく果まなばず

②

小雨ふり雁なく越の水の里

旅のころもをかさねてぞぬる

③

静かなる夜に入る前のひと時の

かはたれ時の市のとどろき

④

鳴子して鳥逐うほどのさかしらに

君を胸より去らむ術なし

①第五号。②第六号。③第七号。④第八号。（明治四一年）

明治四一年四月から八月まで、計二一首の短歌を掲載する。新詩社『明星』の短歌の世界への登場であった。しかし年頭に、北原白秋・吉井勇・木下杢太郎等の『明星』の主力メンバーの退会により、一月に『明星』は一〇〇号をもって終刊する。

その後『昂』にも湖畔は参加し、①第二年第一号、②第二年第一〇号、に「鳥かぶと」の題で、他の作品とともに短歌約四〇首が掲載されている。明治四三年（1910）のことである。

新詩社『明星』の同人 渡邊湖畔の創作活動の軌跡

明治四四年（1911）には、自らも主宰者の一人であった『海草』（『微光』）に、明治四四年四月から七月まで七五首の短歌を寄稿している。

その後も新詩社との関わりは続いていたが、『明星』第二次復活までに湖畔は与謝野夫妻の協力を得て、大正六年（1917）五月に第一歌集『草の葉』（寛・晶子の序、所収短歌二五〇首、大正九年（1920）十二月に第二歌集『若き日の祈祷』（寛の序、晶子の序歌、所収短歌四一〇首）、の二冊の歌集を出版する。

また第二歌集『若き日の祈祷』を出版したところから、『霸王樹』（橋田東声・白井大翼等主宰）への短歌の投稿を始めており、大正九年（1920）六月から昭和一九年（1944）二月終刊号まで、約九六〇首の短歌が掲載されている。この『霸王樹』は湖畔の短歌雑誌への投稿の期間が最も長く、投稿した歌数が最も多い。

第二歌集の出版の翌大正一〇年（1921）一月に森鷗外を中心として『明星』第二次が復刊となり、湖畔は創刊号から投稿を再開し、その作品はほとんど毎号終刊号近くまで掲載され、投稿の歌数は六年の期間に約八五〇首にものぼる。『霸王樹』に比べ各回の投稿の歌数もはるかに多い。

『明星』への投稿とともに、他の短歌雑誌への投稿を続ける、という精力的な短歌活動はこの頃から方向転換が始まったようである。

『明星』第二次の期間中に、大正一三年（1928）八月の佐渡への再遊の旅があり、この二度目の訪渡は晶子を伴った旅であった。（『自伝』）

この時期までに、与謝野夫妻とは短歌の師弟関係を越えた密接な交流が生まれており、今回は湖畔宅に滞在した。その時作られた短歌は『明星』第二次、大正一三年九月号に見える。（『越佐遊草』）

先ほど述べた湖畔の創作の方向転換は、創作の分野に漢詩が加わったことである。湖畔は佐渡中学へ進学せず美濃部禎の漢学塾で学んで

新詩社『明星』の同人 渡邊湖畔の創作活動の軌跡

おり漢詩の創作は可能であったと思われるが、寛のように早期の漢詩の作品は残されていない。寛との応酬によって湖畔が漢詩を作っていたという事実が分かるのみで、湖畔自身の現存の漢詩はさらに後の時期まで登場しないのである。寛と湖畔の漢詩の応酬の最初の時期、また双方の漢詩の作品、等の資料が不十分なため、ある時期までの湖畔の漢詩は寛の漢詩を手がかりにした推察の域を出ない。こうした条件のもとで、湖畔の漢詩の存在、幻の存在を整理する作業を行ってみることにした。次の段階への第一歩とするためである。

○湖畔の漢詩創作の開始 第一期

最も早い寛との漢詩の交流を示す資料は、『明星』第二次復刊後の第六卷第三号（大正一四年（1925）三月発行）から寛が「雑俎」の項に掲載し始めた漢詩群である。大正一二年（1923）ごろから『鵲外全集』の編輯を通して知り合った吉田学軒に師事して漢詩の創作を再開した寛は、『明星』誌上に四回にわたって計五〇首の漢詩を発表している。その中に「用韻・和韻・次韻」等湖畔との応酬を示す一三首の漢詩があり、『書簡集成』などにもそれを証する寛の漢詩が見える。

さらに漢詩の応酬の頻繁だったことについては、以前に指摘したように『明星』第二次の同じ号の「一遇の卓」での寛の記述がある。今一度挙げておくならば、

興津に滞在中の湖畔君が頻に漢詩を作って寄越すので自分もそれに次韻したものなどが少しばかり溜った。勿論拙劣極まるものであるが、吉田増蔵先生の批閱を乞ひ得た分だけを此號の「雑俎」の餘白に載せて諸友の一笑に供する。

とあり、先に述べた吉田学軒の校閱済みの漢詩だと述べる。

次に、『明星』第二次、『滿蒙遊草』、『冬柏』、『書簡集成』、『堺博物館蔵』、『渡邊資料館蔵』等に収録される寛の漢詩の資料から、寛と湖

畔の間に漢詩の交流があったと考えられるものを収集整理したものを紹介しておくことにしたい。

『明星第二次』（一）（雑俎所載：「采華莊雜詩」）

第六卷第三号（大正一四年三月）

- ① 拜眞野御陵、用同行渡邊湖畔詩韻
- ② 今年正月十日、對雪書懷、寄渡邊湖畔養病在興津
- ③ ④ 和湖畔興津養病雜詩韻却寄二首
- ⑤ 聽三子論國風而有感、用湖畔詩韻
- ⑥ ● 湖畔所贈詩云、「……」乃和湖畔韻以答
- ⑦ 茲二月十日、與同社諸子由……寄到一詩、乃用其韻、却酬

『明星第二次』（二）（雑俎所載：「遙青書屋雜詩」）第九卷第三号（大正一五年一〇月）

- ⑧ 答湖畔問近狀
- ⑨ ⑩ ⑪ 郊西移居三首 用湖畔詩韻。丙寅初秋作
- ⑫ 四疊韻贈湖畔（集）2・378
- ⑬ 書屋口占 用湖畔所寄韻
- ⑭ 七律 ② 五律 ③ ④ 七絶 ⑤ 七律 ⑥ 七絶（七絶）
- ⑦ 七絶 ⑧ 五律 ⑨ ⑩ ⑪ 五律 ⑫ 五律 ⑬ 五律
- 『滿蒙遊草』（昭和三年）
- ① 佐渡渡邊湖畔有約不至、乃有寄此
- ② 七言六句

『冬柏』（昭和九年）昭和一〇年）

- ① 時事有感三用湖畔君來示詩韻 五・四
- ② 雪後口占、四用湖畔君來示詩韻 五・五（『集』4/43「湖」④）
- ③ 與湖畔君別遙有此寄 五・八（『集』3/325）
- ④ 疊韻酬湖畔君 々
- ⑤ 酬湖畔君次其寄懷韻 々
- ⑥ 遙青書屋雜詩 用渡邊湖畔君寄懷韻 五・一〇（『集』3/370）

⑦遊佐渡國、宿渡邊湖畔君家、次主人所不詩韻

五・一二〔湖〕①

⑧偶感、用渡邊湖畔君寄懷韻

六・二

●哭與謝野先生

六・四

①五律 ②五律 ③五古

④五古 ⑤七律 ⑥七絶

⑦五律 ⑧五律 ●五律

〔書簡集成〕

①三疊韵呈湖畔兄

2/378 (大正一五年八月三〇日)

②中秋口占

2/484 (昭和四年九月二日)

〔塚博〕①

③寄懷于湖畔君

3/325 (昭和九年六月三日)

〔柏〕5/8

④⑤書懷廣和湖畔君瑤韻

3/366 (昭和九年九月五日)

⑥書懷 用湖畔君寄懷芳韻

3/370 (昭和九年九月一日)

〔柏〕5/10

⑦無題

4/43 (昭和十一年五月二六日)

〔柏〕5/5 〔湖〕④

①五律 ②七律 ③五古

④⑤七絶 ⑥七絶 ⑦五律

〔塚博物館藏〕

①中秋

〔集〕2/484

②疊韻答湖畔

③其二、用湖畔所寄詩韻

④次佐渡渡邊湖畔 正月六日所寄詩韻

⑤書懷用渡邊湖畔近作詩韻

①七律 ②七絶 ③五律 ④七絶 ⑤七絶

〔渡邊資料館藏〕

①昭和九年晚秋遊佐渡訪湖畔君先有五律一首次其韵以酬

〔柏〕5/12

新詩社『明星』の同人 渡邊湖畔の創作活動の軌跡

②偶成四疊韵

〔集〕4/43

③雪後用湖畔君來示韵

④次湖畔兄寄懷瑤韵以酬

〔柏〕5/8

⑤遙青書屋雜詩傳湖畔詞兄一粲併乞高和

⑥謝湖畔君

〔柏〕5/8

⑦書懷次湖畔君芳韵

⑧⑨春日懷湖畔君二律 昭和三年三月二日

①五律 ②五律 ③五律 ④七律 ⑤五古 ⑥五古

⑦五律 ⑧⑨七律

※『集』は『書簡集成』の巻及び番号、〔湖〕は『渡邊資料館藏』の資料番号、〔塚博〕は『塚博物館藏』の資料番号、〔柏〕は『冬柏』の巻号を示す。

以上挙げた資料に見える寛の漢詩には重複するものもあるので、それを除外すれば対湖畔の寛の漢詩は約三五首を数える。現存するのは寛の詩だけなので一方通行的な推論なのだが、例外的な存在として湖畔自作の二首の詩、『明星』第二次の⑥(七言絶句)と『冬柏』の●『哭與謝野先生』(五言律詩)がある。前者の詩についてはすでに述べており、後者の詩については後に挙げる。

○寛の三度目の佐渡訪問までの湖畔との交流

大正一四年(1925)ころに始まった寛と湖畔の漢詩の応酬は、昭和九年(1934)に入るとさらに回数が増加してきている。昭和九年一〇月の三度目の佐渡訪問までの寛の「書簡」からその実状を推測把握できるので、この機会に寛の湖畔宛の書簡を次に提示しておきたい。

〔書簡集成〕

(一)

拝復 御高吟二首をお示し被下候と共ニ、ご親切なるお手帋を拝し

新詩社『明星』の同人 渡邊湖畔の創作活動の軌跡

申候。雅印種々、これも羨ましく存じ候。なかに「竹中人」尤も感服仕り候へども、素人の鑑賞、定めて間ちがひをるべく候。

先便の御詩、末句は「字々榮」の誤写に御坐候。「榮」ハヒカルと訓じ度く候。猶「字々馨」、「燦若星」なども妥当ならんと存じ候が如何。

二見港の御作、「湘妃、海客」、「風煙、烽火」の兩聯、結構ニ拝し候。結句も雄渾ニ候。但し「蒼茫」二字、なほ後推敲被下候やう望ましく候。

中酒の御作ハ、起し得て先づよろしく候。兩聯も完璧と存じ候。「笑茗」一句、猶餘地あるべしと、之が氣になり申候。或は前聯は「心上方圓變、眼前尺寸迷」となされ候ては如何にや。取りあへず、拜讀の喜びを述べ申し候。

☆湖畔が漢詩二首を寛に送り、寛が先便の漢詩について講評、詩語・詩句を修正。二首の詩題は「二見港」、「中酒」、「中酒」の前聯を「心上方圓變、眼前尺寸迷」に修正。

(二) 御高書兩通、忝なく拜受、御感興多くして、御新作の詩を重ねてお示し被下、小生も心躍り申し候。

別帑未定稿の燕作ながら、偶感を賦し申候。歌壇に對し、遺憾の意を述べしに候。

☆湖畔から新作の漢詩を呈示、寛が「偶感」の詩を湖畔に送る。

(三) 御作の漢詩、拜讀仕り候。承句はあのままにてよろしきも、聯が猶御再考の餘地あるべしと存じ候。甚だ失礼ながら、拙意を御参考までニ書き添へ候。吉田先生ニ一応見てお貰ひニなるがよろしく候。一二首ならば急ぎて御覽下さるべく候。……

☆湖畔が寛に漢詩を贈呈。「承句」の語により絶句の詩。添削を記入し、吉田学軒の校閱を勧める。

(四)

前信に御覽に入れ候疊韻を別帑の如くニ改め候。ご叱正被下度候。☆寛が漢詩(二)の修正作を送る。

(五)

そのため御高吟を拜しながら御返事がおくれ、失礼を重ね候。お示しの七律、完成の御作と拜し申候。殊に「樽前無奈神容類」の一句、敬服仕候。詩ハかくの如く新語と新意が必要と存じ申候。小生の疊韻をお褒め被下、過分に存じ候。

この度のお作ニも次韻致度候へども、只今その餘暇無之候。

☆湖畔が七律詩を寛に贈呈。「樽前無奈神容類」の詩句。

(六)

妻よりもよろしく申上候。七律みな活對にて、おもしろく拜し候。

また昨日は御近作の詩と共にお手帑を頂きました。

詩に比べて、お歌はよほど遜色が見えるのは、しばらく御作りにならなかつた為めだと思ひ失望は致しません。……(略)……この意味で、漢詩などを作るのは、一種の修養のためで、悪く云ふと遊戯分子が多いのです。

……(略)……漢詩は其意味でタメになります、

☆漢詩の創作に對する寛の見解。

(七)

(漢詩) 一首(寄懷于湖畔君) 五古一首

右、即吟に候。御一笑被下度候。……(略)……

貴下の歌は勿論、漢詩もお見せ被下度候。

☆寛が漢詩「寄懷于湖畔君」を湖畔に贈呈。寛が湖畔の漢詩を催促。

(八)

先便の拙詩、少しく改訂致し候。

☆(七)の詩の修正改訂作を贈呈。

(九)

啓上 御高作續々拜見を得、うれしく候。ために炎日を忘れ申候。「粉散」は「雲散」としては如何。(第二句を別のことに改めて)妻よりもよろしく申傳候。「俗縁永雲散」「塵縁永雲散」「世縁早雲散」など如何にや。

小生も拙速主義にて、瑤韻を潰し申候。

☆湖畔が漢詩を贈呈。寛が第二句の修正三案を提示。

(十)

貴下のお歌、一語の使ひ方も旧套に囚へられぬやう、昭和人中、特に貴下一人の新詩語を以てお作り下され候やう、漢詩に對すると同様の御努力を切望致し候。：(略)：。

拙作の詩、御批判願上候。いづれ吉田先生の太政によりて安定させたと存じをり候へども、ともかくも高韻に次ぎて差出候。

☆寛が湖畔に漢詩を贈呈、批評を乞う。

(十一)

早速險韻に高和をたまひ候こと、驚歎致し候。自由なる御着想、殆ど次韻の痕を見ず候。再び一詩を呈して、感謝を表し候。なほ別に五律の御新作を頂き、次韻致し度候。

☆湖畔が次韻の漢詩を贈呈、寛が漢詩を呈上。さらに湖畔が五律の新作を贈呈、寛が次韻の詩を作る意志を表明。

(十二)

此月はお歌を少しにてもお遣わし被下度候。関西の諸君など頻にお作に刮目致しをり候。御近作の漢詩一首お示し被下うれしく存じ候。何れも瓊字にて次韻甚だむつかしく候。

(漢詩)二首(「書懷廣和湖畔君瑤韻」「又」の二首)

これは定めて著にも棒にも掛らぬ駄作と存じ候。御一笑被下度候。：。：。

この程、吉田先生に御目に懸り候。相変らずお元氣にて、喜び申候。

新詩社『明星』の同人 渡邊湖畔の創作活動の軌跡

貴兄の近状をもお尋ねなされ候。

☆湖畔が漢詩二首、寛が次韻の漢詩二首。七絶(「書懷廣和湖畔君瑤韻」「又」の二首)

(十三)

出発は大抵十月廿五日の夜行列車に致すべく、長岡、三条に各一泊し、弥彦を経て廿八日の夜に新潟に著し、卅日まで滞在、卅一日に御地へ参り可申候。：。：。

五律も応酬致度候。海府まで行き得べくば参り度候。御地に十一月五日頃まで遊び、次に詩を添へ候。

(漢詩)一首(「書懷 用湖畔君寄懷芳韻」)七絶

右は先日の拙作を改作せしに候。之は吉田先生の御一閱を乞ひ得たるものに候。

☆寛が五律の応酬を希望。寛の漢詩(十三)の第二首の修正改作、吉田学軒の校閲済み。

- (一) 279 昭和九年二月十三日付、湖畔二首。
- (二) 280 昭和九年二月二十日付、湖畔一首、寛一首。
- (三) 281 昭和九年二月二十六日付、湖畔一首、七絶。
- (四) 282 昭和九年二月二十七日付、寛の(三)の改作。
- (五) 283 昭和九年三月十四日付、湖畔七律詩一首。
- (六) 284 昭和九年五月二十一日付
- (七) 285 昭和九年六月二十三日付、寛一首。
- (八) 286 昭和九年六月二十三日付、(七)の改訂。
- (九) 287 昭和九年七月三・四日付、湖畔一首。
- (十) 288 昭和九年七月十七日付、寛一首。
- (十一) 289 昭和九年七月二十九日付、湖畔一首、寛一首。

湖畔・五律詩、寛・次韻詩。

新詩社『明星』の同人 渡邊湖畔の創作活動の軌跡

(甲) 366 昭和九年九月五日付け、湖畔二首、寛次韻詩二首。

(乙) 370 昭和九年九月十五日付け、寛一首、七絶

※湖畔の漢詩一〇首。寛の漢詩、九首。

以上挙げた『書簡集成』巻三収録の寛の二三通の「書簡」によれば、昭和九年二月から九月までに、寛から湖畔へ九首、湖畔から寛へ一〇首の漢詩の交流があった。実際にはもっと頻繁な応酬があったと思われるが、やはりここにも湖畔の漢詩の実作の痕跡は全く残されていない。

○佐渡への旅 第二期

寛と湖畔の漢詩の交流は、大正一四年ごろの第一期に次いで昭和九年に入って第二期を迎える。この第二期の交流の内容は、前期とは質・量ともに異なる最盛期といえよう。期間としては前期に比して極めて短く一年ほどであったが、十一月の寛・晶子夫妻の佐渡訪問は両者の交流関係を今まで以上に密接にする機会となった。

十一月一日、両津の埠頭に着いた寛は湖畔邸に赴き宿泊、深更まで作歌。翌二日からは佐渡での行動を湖畔とともにする。五日に再び湖畔の家に帰り、夜は人を交えて雑談、揮毫、湖畔愛蔵の古書画鑑賞に費やし、「また、初めて佐渡へ著きし日主人の示せる寛を迎ふる漢詩に次韻す」と記している。翌六日、佐渡を離れている。佐渡滞在五日、その間ともに佐渡を遊行、湖畔邸に二泊という、今回の佐渡の旅の日程であった。寛の訪渡を歓迎する湖畔の詩は不詳だが、「自伝」に言う「次韻」の詩は次の詩である。

昭和九年晩秋遊佐渡訪湖畔君先有五律一首次其韵以酬^①

昭和九年晩秋、佐渡に遊び湖畔君を訪う。先に五律一

首有り、其の韵に次し以て酬ゆ

下船把手笑 船を下り 手を把りて笑う

亦後渡江来 亦た後に江を渡って来たる

迎我詩先有 我を迎えて 詩先ず有り

感君淚早催 君に感じて 涙早に催す

風流同愛字 風流 同じく字を愛し

逸興豈辭杯 逸興 豈に杯を辭さんや

山水佐州好 山水 佐州好し

乞傾遲暮才 遲暮の才を傾くるを乞う

この後、寛から佐渡訪問の謝意を表した絵葉書（十一月二四日付、ペン書き）が寄せられており、裏に「偶成、次上田喜太郎君近作詩」の詩題で七絶一首を記している。

さらに二七日の日付（ペン書き）で書簡を寄せ、「次友人某君韻」

の詩題で二首の七絶を記し、「右御次韻下されたく候」と、湖畔に次韻の詩を求めている。

翌昭和一〇年（1935）二月六日付の書簡には、湖畔から送った短歌に対して近日中の返送を約した後に、「二月五日雪後偶成」の七絶一首、「古沢君見示留別詩、次韻以送其再赴任于滿州」の七絶一首、「偶成」の七絶一首の計三首の詩を記して、「右新作に候、御叱正被下度候。」と湖畔の批評を求めている。これは湖畔の寛に宛てた最後の書簡であり同時にこの書簡に記された七絶三首は寛自作の漢詩の絶筆でもある。

なお湖畔が寛と最後に会ったのは、寛の六三歳の誕生日（三月二六日）の翌日の二七日だったが、「自伝」には「渡邊湖畔と語る」とのみ記されている。

寛亡き後、湖畔は『冬柏』に寄稿しているが、第八巻第六号（昭和二年六月）で終わっている。『冬柏』自体は昭和二十七年まで発行されているが、『冬柏』内部の事情もあり、湖畔は自作の発表の場を他に求めていったようである。短歌と漢詩の両分野の作品を、前者は

『霸王樹』、後者は『東華』へ寄稿するようになっていった。

○寛没後の湖畔の創作活動

昭和一〇年に寛が没して後も、湖畔は新詩社の同人でありつづけたが、『冬柏』への投稿は絶えてしまった。短歌は寛の生前から投稿していた『霸王樹』には続けており、昭和一九年(1944)七月の終刊号まで掲載されている。その詳細は『渡邊湖畔遺稿集』によって知ることが出来る。

この時期の創作活動を漢詩を中心として述べておくことにしたい。短歌雑誌への総数約九六〇首に及ぶ投稿歌数の四分の三以上は昭和一〇年代までのものであり、昭和一一年以降の投稿歌数の急激な減少は湖畔の創作志向が漢詩へと転向し始めていたからではないかと考えたのが、その理由の一つである。創作活動の最終期に入った湖畔は年齢五十歳に達していた。

少年時代には美濃部楨を、壮年期には短歌の師でもあった与謝野寛とその縁で吉田学軒を、漢学漢詩の師とした湖畔が、次に師としたのは『東華』を主宰する土屋竹雨であった。

土屋竹雨は明治二〇年(1887)四月一〇日、昭和三年(1928)一月五日歿。寛より一四歳、学軒より二歳、湖畔より一歳年下である。山形県鶴岡の人、名は久泰、号を竹雨。東京大学法学部卒業後、昭和三年(1928)に芸文社を創設し漢詩文雑誌『東華』を発行。六年(1931)に大東文化大学教授、二四年(1949)に芸術院会員・大東文化大学の学長となった。詩集『猗廬詩稿』二冊がある。昭和三年創刊の『東華』は昭和一九年(1944)四月に一八八集で廃刊後、二二年(1947)に復刊、三三年(1958)三月に二五〇集で終刊。

湖畔が『東華』に寄稿した漢詩は『渡邊湖畔遺稿集』に収録されており、多少の脱漏は免れないが昭和一〇年後の湖畔の漢詩創作を知る

新詩社『明星』の同人 渡邊湖畔の創作活動の軌跡

最も精密な資料であり、昭和一〇年四月(八一巻)から湖畔の詩が掲載される。『遊尖閣灣』七律一首である。これ以後ほとんど毎号に寄稿し、復刊後昭和三〇年六月(通巻一九九巻)まで作品は掲載されている。ちなみに湖畔は昭和三〇年(1955)ころには視力の衰えによって、創作活動を中止し始めていた時期である。

『遺稿集』に収録された湖畔の漢詩は約四〇〇首ほどであるが、そのうち『東華』掲載の漢詩は二五〇首を越える。詩の内容は豊富で、佐渡の風景、旅、竹雨への贈詩、また韋応物や『明史』・『左傳』の読後の詩など中国に関連するものもある。吉田学軒の古稀を祝う五律二首の詩とともに、五律の「哭与謝野先生」、七律の「哭与謝野先生」の二首なども掲載されている。学軒の古稀の詩二首と、寛を哭する詩二首が、同じ八二巻(昭和一〇年五月)に見えるのは興味深く、この四首の詩を挙げておきたい。

奉壽吉田學軒先生古稀

吉田学軒先生の古稀を壽ぎ奉る

先生年七十

先生 年七十

仍且惜居諸◎

仍りて且つ居諸を惜しむ

續見兩朝制

續は兩朝の制に見われ

文推一代儒◎

文は一代の儒に推さる

注箋耽古學

注箋 古學に耽り

出處背時趨◎

出處 時趨に背く

更究本邦典

更に本邦の典を究めて

進將資廟謨◎

進んで將って廟謨に資せんとす

(韻は上平六・魚、七・虞)

藝苑荒蕪久

芸苑 荒蕪久し

難分蕪與猶◎

蕪と猶とを分かち難し

詞源窮萬葉

詞源は万葉を窮め

文績足千秋◎

文績は千秋足る

新詩社『明星』の同人 渡邊湖畔の創作活動の軌跡

古調誰能繼 古調 誰か能く繼ぎ

斯人豈易求◎ 斯人 豈に求め易からんや

悠然遊物外 悠然として物外に遊び

尚友是前修◎ 尚友は是れ前修 (韻は下平一一・尤)

哭與謝野先生 (『冬柏』第六卷第四号)

与謝野先生を哭す

生芻青一束 生芻 青き一束

肅奠代蘋蘩◎ 肅奠 蘋蘩に代う

撒瑟千秋恨 瑟は千秋の恨みを撒らし

傳衣半夜恩◎ 衣は半夜の恩を伝う

容光猶在眼 容光 猶お眼に在るがごとく

泣淚賦招魂◎ 泣淚 招魂を賦す

遺愛須珍重 遺愛は須く珍重すべく

詩書手澤存◎ 詩書 手沢存す (韻は上平一三・元)

哭與謝野先生 与謝野先生を哭す

講席年前我屢陪◎ 講席 年前 我れ屢しば陪す

蒹葭倚玉愧疎才◎ 蒹葭 玉に倚り 疎才を愧ず

恩終難報恨無極 恩は終に報い難く 恨み極まり無し

魂不可招腸九迴◎ 魂は腸の九迴を招く可からず

殯殿篆香空作字 殯殿 篆香空しく字を作し

靈帷燭淚自成堆◎ 靈帷 燭淚自ずから堆を成す

明朝扶櫬青山路 明朝を扶櫬す 青山の路

定有哀鳴大鳥來◎ 定めて哀鳴して大鳥の來たるあらん

(韻は上平一〇灰)

〇むすび

『明星』の同人であった佐渡の渡邊湖畔の創作について、短歌ではなく漢詩を中心として考察を試みたが、『渡邊湖畔遺稿集』収録以前の作品については資料が限られており、解明することは困難と言わざるを得ない。しかし師の与謝野寛の作品を通して、湖畔の漢詩の創作活動が意欲的・精力的であったことは推察できたものではなからうか。同時に『遺稿集』に収める湖畔の漢詩は評価に値するものがあると考えられ、筆者は近い将来に熟読の機会を持ちたいと願っている。

[注]

(1)『わかな舟』山田穀樹主宰。佐渡相川の人、「新潟新聞」記者、歌人で新詩社の同人。明治三五年、第二号(五月号)。「遺稿集」には掲載無し。明治三九年以降の作品を収める。

(2)『白百合』相馬御風等主宰、明治三六年十一月〜明治四〇年四月。

(3)『文章世界』田山花袋編輯、明治三九年一月〜大正九年二月。

(4)『自伝』には、明治三五年(1900)、此夏、越後及び佐渡に遊ぶ。：新潟にては同人山田穀城・須藤鮭川二君に迎へられ、佐渡にては相川の同人柄澤いかづち翁の家に宿す。

(5)また、明治三六年(1900)五月、：渡邊湖畔等の諸君、新詩社同人となる。

(6)『明星』第一次 湖畔・掲載リスト(遺稿集未収)

新詩社詠草 明治四一年第五號(明治四一年四月刊) 五首

新詩社詠草 明治四一年第六號(明治四一年六月刊) 四首

新詩社詠草 明治四一年第七號(明治四一年七月刊) 七首

新詩社詠草 明治四一年第八號(明治四一年八月刊) 五首

(7)『昂』(第一年第一号〜第五年第二二号。明治四二年一月〜大

正二年二月。六〇冊)

① 第二年第一号 (明治四三年一月) 二〇首。

② 第二年第一〇号 (明治四三年一〇月) 二〇首。

(8) 『海草』(『微光』) 本間五丈原・渡邊湖畔主宰 (明治四四年三月〜九月)

① 驚異 第二号 (明治四四年四月) 一九首

② 青竹のきしむ音 第三号 (明治四四年五月) 一九首

③ 恋のいやはて 第四号 (明治四四年六月) 一九首

④ 海鳥の声 第五号 (明治四四年七月) 一八首

(9) 『草の葉』東京・天弦堂書店。大正六年五月一五日刊。序：与謝野寛・晶子。装幀挿画：藤島武二。扉：「恩師与謝野寛 先生に献ず」。『若き日の祈禱』東京・アルス社。大正九年一月二〇日刊。

与謝野夫妻への献詞。序：寛、序歌：晶子。装幀挿画：高村光太郎。

(10) 『霸王樹』橋田東声・白井大翼等主宰 (大正八年〜昭和一九年七月)。投稿の期間は、大正九年六月から昭和一九年八月まで約二五年間、寄稿歌数は約九六〇首。大正八年、同人。

(11) 『明星』第二次、大正一〇年一月から昭和二年四月。

(12) 『自伝』によれば、大正一三年八月 (1928) 「晶子を伴ひ、築紫より来れる白仁秋津……と越後の赤倉温泉に吟行す。佐渡より渡邊湖畔君来り会するに遇ひ、……新潟を経て佐渡に再游す。」

(13) 湖畔の長男栄太郎が暁星中学入学に際し与謝野家に下宿、寛の幹旋により湖畔は東京中野に家を新築し、寛の次男秀が湖畔宅に長期滞在するなど、私的な交流が始まっている。

(14) 『明星』第二次。第五卷第四号。大正一三年九月、「越佐遊草」三六首。

(15) 西村富美子「与謝野鉄幹と漢詩―『明星』第二次時代の漢詩人と謝野寛」六七頁。

(16) 「自伝」昭和九年。

新詩社『明星』の同人 渡邊湖畔の創作活動の軌跡

(17) 渡邊資料館蔵：寛の草稿。原稿用紙：枠外に「遙青書屋」とあり、ペン書き。『冬柏』(第五卷第二二号) には詩題が「遊佐渡國、宿渡邊湖畔君家、次主人所示詩韻」とある (詩にも多少字の異同がある)。

(18) 『集成』卷三394。『集成』卷三396。

(19) 『集成』卷三415。「二月五日雪後偶成」及び「偶成」の二首は、『冬柏』第六卷第三号 (昭和一〇年一月) にも見える。

(20) 「自伝」昭和一〇年。

〔参考文献〕

◎ 『長城詩抄』一冊。堀口久萬一著・堀口大學譯。大門出版。昭和五十年三月三日。『長城詩稿』三卷、三百三十首の中から九十九首を選んで訳した (あとがき：堀口大学)。

◎ 『学軒詩集』吉田増蔵詩。無窮会、汲古書院、平成十六年刊。

◎ 『渡邊湖畔遺稿集』一冊、渡邊栄太郎。早稲田大学印刷所。昭和四十七年八月二〇日刊。(はしがき一 渡邊栄太郎、はしがき二 岡崎幸宮)。なお、本稿の中で用いた「渡邊湖畔資料館」の資料番号は、筆者がかつて便宜上付した資料番号である。

◎ 「堺博物館蔵」(鉄幹自筆の漢詩草稿)、本稿では初めて「堺市博物館」蔵の鉄幹の漢詩の草稿のうちの何点か (詩題のみ) を用いた。平成二十二年十一月二十五日に、堺市博物館で初めて館内展示され、当日館内でそれらの資料について筆者が解説と講演を行った。なお平成二十三年度の博物館紀要に、鉄幹の草稿 (吉田学軒の朱筆校閲) と筆者による報告論文とを掲載している。『堺市博物館研究報告』第31号)

(三重大学名誉教授)